

# 国士館大学蔵『伊勢物語』の研究（三）

松野 彩

修士課程 鈴木 健太郎

修士課程 相磯 詩音乃

二〇二四年度・中古ゼミ四年生

## 一、はじめに

本稿は、二〇二三年、二〇二四年に続き、国士館大学所蔵の室町末期の書写とされる『伊勢物語』の写本について、<sup>注1</sup> 本学・中古ゼミの大学院生、四年生が翻刻を行ったものに、学習院大学蔵本<sup>注2</sup>および、千歳文庫蔵本との異同を確認し、<sup>注3</sup> 国士館大学蔵本の位置づけを確かめる試みである。

書誌情報については、二〇二三年に記載した通りである。各ページの行数については、本稿の対象範囲（十一丁表から十八丁裏まで）では、一ページにつき十行で、二〇二四年までに扱った範囲と同じであった。

本稿では、前述したように十一丁表から十八丁裏までを扱うが、十七丁裏と十八丁表との間に脱落（または綴じ間違）があり、内容としては、十六段の途中から三十一段まで、三十九段の途中から四十一段の途中までとなっている。以下、「二、翻刻」「三、考察」の順に検討を加える。

## 二、翻刻

### 《凡例》

\*各写本の略記号は以下の通りである。

【国】…国士館大学蔵本

【学】…学習院大学蔵本

【千】…千歳文庫蔵本

\*【国】の本文を、丁・行そのままに翻刻した。算用数字は行数を表す。

\*【国】と【学】や【千】との間に異同がある場合は、【国】に傍線を施し、すぐ左側に【学】、その次の行に【千】の本文を示した。なお、【国】や【学】に文字が記されているが、【千】に何も記されていない場合は「×」で示した。

\*第三節「考察」で取り上げる例については、右側に「\*」をつけ、その後に第三節で掲載するさいの番号を付した。

### 《翻刻・本文》

#### 十一丁表

1 かのともたちこれを見ていとあはれと思ひてよるの

思

おも

2 もの<sup>まて</sup>をくりてよめる

物

もの

3 年たにもとおとてよつはへにけるをいく<sup>度</sup>君をたのみきぬらん

たひきみ

ん

たひきみ

む

4 かくいひやりたりければ

5 これやこのあまのは衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけれ

きみ

きみ

6 よろこひにたへて又

7 秋やくる露やまかふと思ふ<sup>まて</sup>あるは涙のふるにそ<sup>有</sup>ける

つゆ

おも

涙

有

つゆ

おも

なみた

あり

8 <sup>十七</sup>年 ころをとつれさりける人のさくらのさかりに見

十七年

××とし

9 にきたりければあるし

10 あたなりと名にこそたてれ桜 花年 にまれなる人も待 けり

な 桜 年 まち

名 さくら とし まち

十二丁裏

1 かへし

返

返

2 けふこすはあすは雪とそふりなまし消すは有共花とみましや

古今 きえ ありとも 見

×× きえ 有とも 見

3 <sup>十八</sup> 三

むかしなま心ある女有 けり男 ちかうありけり女哥 よ

十八

あり おとこ 有 うた

××

あり おとこ あり うた

4

む人なりければ心みむとてきくのはな <sup>\*(11)</sup> うつろへる

見

花の

見

花の

5

をゝりておとこのもとへやる

6

紅 にゝほふはいつら白雪 の枝 もとをゝにふるかとぞみゆ <sup>\*(21)</sup>

紅

白雪 枝

もみ

くれなひ

しらゆき えた

も見

7

おとしらすよみによみける

8

くれなゐににほふか上の白菊 は折 ける人の袖 かともみゆ

紅

ゝ うへ しらきく おり

そて 見

くれなゐ

ゝ うへ しらきく 折

そて 見

9 <sup>十九段</sup> むかしおとこみやつかへしける女のかたにこたちなり

十九昔 宮

××むかし みや

10 ける人をあひしりたりけるほとんなくかれにけりおなし

十二丁表

1 所 なれは女のためにはみゆるものからおとこはある

ところ 見 物

所 見 もの

2 物かともおもひたらす女

思

思

3 あま雲のよそにも人のなり行かさすかにめにはみゆる物から

雲

ゆく

見

くも

ゆく

見

4 とよめりければおとこかえし

返 返

5 ＊(1)⑩ あま雲 のよそにのみしてふることはわかある山のかせはやみなり

古今ゆきかへり くも

×××××××××× くも

風 風 也  
なり

6 とよめりけるはまたおとこある人となんいひける

又 ん

また む

7 二上巻 むかし男 やまとにある女を見てよはひてあひに

二十 おとこ

×× おとこ

8 けりさてほとへて宮つかへする人なりければかへり

9 くるみちにやよひはかりにかえてのもみちのいと

10 おもしろきをおりて女のもとにみちよりいひや

、 、

十二丁裏

1 る

2 君 かためたおれる枝 は春 なからかくこそ秋のもみちしにけれ

君 お 枝 春

きみ を えた はる

3 とてやりたりければ返事は京にきつきてなん

む ん

4 もてきたりける

5 　　いつのまにうつろふ色　のつきぬらん君　かさとには春　なかるらし<sup>\*4②</sup>

色

んきみ

春

らし

いろ

むきみ

ゝる

へし

6<sup>三十一段</sup>　むかし男　女いとかしこく思　ひかはしてこと心なかりけり

廿一

おとこ

思

××

おとこ

おも

7　さるをいかなる事か有　けんいさゝかなることにつけて世中

ありん

ありむ

8　をうしと思ひていて、行なむと思ひてかゝる哥<sup>\*4⑤</sup>を<sup>\*4④</sup>

思ひて

いなん

ひ

うた

思　×

いなむ

×

哥

9　なんよみてものにかきつけける

ん

物

む

もの

ゝ

ゝ

10

いて、いなは心かるしといひやせん世のありさまを人はしらねは

ん

む

十三丁表

1 とよみをきていて、いにけりこの女かくかきをきたる

2 をけしう心をくへきこともおほえぬをなに、よりてかか、

\*<sub>(4)</sub><sub>(5)</sub>

なに、よりてかか、

なに、よりてかか×

3 らん|といいたうなきていつか|たにもとめゆかん|とかとに

む

かた

む

む

方

む

4

いて、とみかう見、<sup>\*<sub>(4)</sub><sub>(5)</sub></sup>れといつこをはかりともおほえさりければかへりいりて

見

、けれど

見

、けれど

5 思 ふかひなき世なりけり年 月をあたに契 て我 やすまひし<sup>\*(2)</sup>

思 年 ちきり 我 し  
おも とし ちきり われ ×

※【千】は「おもふかひなき世なりけりとし月を」の右側に二行にわたって、「といひてなかめをり」「人はいさおもひやすらむ玉かつらおもかけにのみいと、みえつ、」とある。

6 といひてなかめをり

といひてなかめをり

××××××××

7 人はいさ思ひやすらん玉かつらおもかけにのみいと、みえつ、

人はいさ思ひやすらん玉かつらおもかけにのみいと、みえつ、

××××××××××××××××××××

8 この女いとひさしくありてねんしわひてにやあり

む

む

9 けんいひをこせたる

ん

む

10

今	はとて忘る	草	のたねをたに人	の心にまかせすもかな
今	わする、草		ひと	哉
いま	わする、くさ		人	かな

十三丁裏

1 かへし

返

返

2

忘	草うふとたにきく物ならは思	ひけりとはしりもしなまし
忘		思 ×
わすれ		おもひ

3

又くありしよりけにいひかはしておとこ

4

わするらんと思ふ心のうたかひにありしよりけに物ぞかなしき

新古今

覧

×

×××

覧

×

5 かへし

返 返

6 なか空 にたちゐる雲 の後 もなく身のはかなくも成 にけるかな

新古今中 そら

くも あと

なり

哉

×××なかそら

くも あと

なり

哉

7 とはいひけれとをのか世ゝになりにければうとくなりけり

8 <sup>(二五)</sup>むかしはかなくてたえ <sup>(四)</sup>けるなか猶やわすれさりけん

廿二

たえにける

ん

××

たえにける

む

9 女のもとより

10 うきなから人をはえしもわすれねはかつうらみつゝ猶そ恋しき

新古今

こひ

×××

こひ

十四丁表

1 といへりければされはよといひておとこ

2 あひみ<sup>み</sup>ては心ひとつをかはしまの水のなかれてたえしと思ふ<sup>ふ</sup>

見

見

×

×

3 とはいひけれどその夜<sup>よ</sup>いにけりいにしへゆくさきのこと

夜

よ

4 ともなといひて

、

、

5 秋の夜のちよを<sup>を</sup>一<sup>一</sup>夜になすらへてやちよしねはやあく時のあらん<sup>ん</sup>

一

ひと

む

ん

6 返し

7 秋のよの千よをひと夜になせりと詞のこりてとりや鳴なん

秋 夜 ち ことは なき ん

あき 夜 ち ことは なき む

8 いにしへよりもあはれにてなん\*<sub>(2)</sub><sub>(3)</sub>かよひける

なむ

× ×

9 二十三むかしゐなかわたらひしける人のことも井のもとにいて、

廿三 むかし 子

× × 昔 こ

10 あそひけるをおとなになりにはおと\*<sub>(1)</sub><sub>(2)</sub>こも女もはち

× × × × × ×  
おとこも女も

おとこも女も

十四丁裏

1 かはして有 けれとおとこはこの女をこそえめと思 ふ

あり おも

あり おも

2 女はこの男 をと思 ひつゝおやのあはすれともきか

おとこ おも

おとこ おも

3 てなん有 けるさてこのとなりのおとこのもとよ

んあり

むあり

4 りかくなん

5 つゝぬつの井つゝにかけしまろかたけ過 にけらしなみもみさるまに

井 ん すき 見

ゐ 井 すき 見

6 女かへし

返 返

7 くらへこしふりわけかみもかた過ぬ君ならすして誰かあくへき

かみ すき きみ たれ

神 すき きみ たれ

8 なといひくつゝゐにほいのことくあひにけりさてとし

年

とし

9 ころふるほとに女おやなくたよりなくなるまゝにもろ

10 ともにいふかひなくてあらんやはとてかうちの國たかや

ん くに

む くに

十五丁表

1 すのこほりにいきかよふ所いてきにけりさりけれとこ

2 のもとの女あしとおもへるけしきもなくていたしや

3 りければおとここ|と心ありてかゝるにやあらむと思ひ

こゝ

4 うたかひてせんさいのな|にかくれゐてかうちへいぬる

中

なか

5 かほにてみれはこの女いとうけさうしてうちなかめて

見

見

6

風ふけはおきつしらなみたつた山夜はにや君かひとりこゆ覧

古今

浪

君

らん

××

なみ

きみ

らむ

7

とよみけるをきゝてかきりなくなしと思ひてかうちへも

河内

かうち

8

いかすなりにけりまれゝかのたかやすにきてみればは

見

見

9

しめこそ心にくゝもつくりけれいまはうちとけてゝつ

心にく

て

心にくゝ

ゝ

10

からいぬかひとりてけこのうつはものにもりけるを

わ物

はもの

十五丁裏

1 見て心うかりていかすなりにけりさりければかの女

見

み

2 やまとのかたをみやりて

方 見

方 見

3 君 かあたりみつゝをらんいこま山雲 なくしそ雨はふるとも

新古今君

見

ん

くも

×××きみ

見

む

雲

4 といひて見いたすにからうしてやまと人こんといへりよ

む

む

5 ろこひてまつにたひくすきぬれは

6

君 こむといひし夜ことに過ぬれはたのまぬものゝ恋 つゝそぬる<sup>\*(4) ⑧</sup>  
 君 すき 物 こひ ふる  
 きみ すき もの こひ ぬる

7

といひけれと<sup>\*(3) ⑤</sup> すますなりにけり<sup>\*(4) ⑥</sup>  
 いひけれとおとこすます  
 いひけれはおとこすます

8<sup>三十四段</sup>

むかしおとこかたゐるなかにすみけり男 宮つかへしに

廿四

むかし

おとこ

××

昔

おとこ

9

とてわかれおしみて行にけるまゝに三とせこさりけ

ゆき

ゆき

10

れはまちわひたりけるにいとねんころにひひける人

む

む

十六丁表

1 にこよひあはむとちきりたりけるをこの男\*(し)⑩ きたり

けるに おとこ

けるに おとこ

2 けりこの戸あけたまへとたゝきけれとあけて哥

と

うた

と

うた

3 をなんよみていたしたりける

ん

む

4 あら玉のとしのみとせを待わひて只\*(し)⑩ 今夜こそにる枕 すれ

たま 年

まち

たゝこよひ

まくら

たま とし

まち

たゝこよひ

まくら

5 といひいたしたりければ

6

梓弓 まゆみつき弓 としをへて我 せしかことうるはしみせよ

あつさゆみ 弓 年 わか

あつさゆみ ゆみ ゆみとし わか

7

といひていなむとしければ女

8

あつさ弓 ひけとひかねとむかしより心は君 によりにしものを

弓 昔 きみ 物

ゆみ むかし きみ もの

9

といひけれとおとこかへりにけり女いとかなしくてしり

10

にたちておひゆけとえおひつかてしみすのある所に

を を をい 水

を をひ 水

十六丁裏

1 ふしにけりそなりけるいはおよひのちして

2 かきつけゝる

3 あひおもはてかれぬる人をとゝめかね我身は今そ消はてぬめる

わか 今 きえ  
わか いま きえ

4 とかきてそこにいたつらになりにけり

5 （二十五段） むかし男 有 けりあはしともいはさりける女のさすか

廿五 おとこ有

× × おとこあり

6 なりけるかもとにいひやりける

7 秋の野にさゝ分しあさの袖よりもあはてぬるよそひちまさりける

古今、わけ袖夜

××、わけさてよ

8 いろこのみなる女かへし

色返

いろ返

9 <sup>＊(13)</sup>みるめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまの足たゆくくる

古今小町見あし

×××××見あし、

10 <sup>二十六段</sup>むかし男五条わたりなりける女をえゝすなりにける<sup>＊(14)</sup>

廿六おとこなりにける

××おとこなりける

十七丁表

1 ことゝわひ\*(3) ③ける人の返事に

わひたりける こと

わひたりける こと

2 おもほえず袖\*(1) ①にみなとのさはく哉ら もろこし舟ののよりし斗に

新古今

袖

みなと一本なみた

哉ら

舟

許

×××

そて

みなと

かな

ふね

許

3(二十七段)

むかし男

女のもとにひと夜いきて又もいかすなりに

廿七 昔

おとこ

夜

××

むかしおとこ

よ

4 ければ女のであらふところにぬきすをうちやりて

手 所

て ところ

5 たらひのかけに見えけるをみつから

6 我はかり物おもふ人は又もあらしとおもへは水の下にもありけり

許 思 した 有

許 思 した あり

7 とよむをかのこさりけるおとこたちきゝて

××こさりける

かのこさりける

8 みなくちに我や見ゆらんかはつさへ水の下にてもろ声になく

した こゑ

した こゑ

9 <sup>二十八段</sup> むかしいろこのみなりける女いてゝいにければ

廿八 昔

×× むかし

10 なとてかくあふこかたみに成にけん水もらさしとむすひし物を

なり ん もの

なり む もの

十七丁裏

1 <sup>(三十九段)</sup> むかし春宮の女御の御かたの花の賀にめしあつけ <sup>\*<sub>(1)</sub></sup> <sup>⑤</sup>

二十九

方

×××

方

※【学】は「むかし御方の花の」の右側に二行にわたって以下の傍記がある。

貞観十一年二月貞明親王為皇太子于時高子為女御

依春宮母儀号也去年十二月廿六日誕生高子年廿七

2 られたりけるに

3

花にあかぬ歎

はいつもせしかともけふのこよひにゝる時はなき <sup>\*<sub>(2)</sub></sup> <sup>⑤</sup>

なけき

なし

なけき

なし

4 <sup>(三十九段)</sup>

むかし男

はつかなりける女のもとに

卅

おとこ

×

おとこ

5 あふことは玉のをはかりおもほえてつらき心のなくみゆらん

たま 許 見 ん

玉 はかり 見 む

6 <sup>(三十段)</sup> 昔宮のうちにてあるこたち <sup>\*<sub>(34)</sub></sup> つほねのまへをわたりけ

卅一 内 こたちの

×× うち こたちの

7 るになにのあたにか思ひけんよしやくさはのならん <sup>\*<sub>(35)</sub></sup> さ

思 ん くさ葉よ ん

おもひ む くさはに む

8 かみむといふおとこ

見

見

9 つみもなき人をうけへは忘草をのかうへにそおふといふなる

忘 草

わすれくさ

10 といふをねたむ女もありけり

※【国】は、この後、三十九段末に飛ぶ。

十八丁表

1 あめのしたのいろこのみのうたにては猶そあり

色

あり

いろ

有

2 けるいたるはしたかふかおほちなりみこのほいなし

也

也

3 <sup>〔四十段〕</sup>むかしわかき男 けしうはあらぬ女を思ひけりさかしら

四十 昔 おとこ

×× むかし おとこ

4 するおやありて思ひもそつくとてこの女をほかへをひやらん

む

む

5 とすさこそいへいまたをいやらす人のこなれはまた心

×また

心

いまた

こゝろ

6 いきおひなかりければと、むるいきおひなし女もいやし

7 ければすまふちからなしさるあひたに思ひはいやまさり

おも

おも

8 にまさるにはかにおやこの女を、ひうつおとこちの

を、

9 涙をなかせともと、むるよしなしゐていて、いぬおとこ

なみた

なみた

10 なくくよめる

十八丁裏

1 いてゝいなはたれか別のかたからんありしにまさるけふはかなしも

誰

ん

たれ

む

2 とよみてたえいりにけりおやあはてにけり猶思ひてこそ

3 いひしかいとかくしもあらしとおもふにしんしちにたえ

4 いりにければ ＊(し) 願 願たてけりけふのいりあひはかりにたえいり

まとひて願たて

許

まとひて願たて

許

5 て又の日いぬの時はかりになむからうしていきいてたりける

ん

む

6 むかしのわか人はさるすける物思ひをなんしけるいま

思　　ん

おも　　む

7 のおきなまさにしなんや

む

む

8 <sup>〔四十一段〕</sup> 昔女はらからふたりありけりひとりはいやしき男の

四十一

おとこ

×××

おとこ

9 まつしきひとりはあてなるおともたりけりいやしき

10 おともたるしはすのつこもりにうへのきぬをあら

### 三、考察

第二節において【国】【学】【千】の異同を確認してきた。本稿の範囲で最も大きな違いは、【国】は十七丁裏が三十一段で終わっているのに、十八丁表が三十九段末で始まっていることである。三十二段から三十九段末までが誤脱なのか、綴じ間違いによるもので、後に現れてくるかは、今後、注視していく必要がある。

なお、その他については、表記においては違う点が多数見られるものの、全体として大きな異同は少なかった。以下、表記と解釈などに関わる異同の順に確認する。なお、本稿では音便は異同として扱わなかった。また、「行なむ」を「ゆきなむ」と読める場合は「行（ゆき）なむ」「、けれど」を「みけれど」と読める場合は「、（み）けれど（ど）」と表記した。

まず、表記についての傾向としては、以下の「1」「2」の二点が確認された。

「1」仮名・漢字表記については、【国】は他の二本よりも漢字を使用する割合が多いが、【国】が仮名としていたところを【学】や【千】が漢字としていたところもあるのは、前稿までの範囲（二丁表から十丁裏）と同じであった。

「2」【国】は前稿までの範囲（二丁表から十丁裏）と同様に、和歌の表記に関しては、ほぼ一行におさめていた。

【学】は和歌がほぼ二行にわたって（一行目に上の句、二行目に下の句）書かれている。また、一行目と二行目の間、

和歌よりも高い位置に「新古今」「古今」などの注記がある箇所がある点も前稿までの範囲と同じである。ただし、【学】は、前稿の九丁裏7行目「夜もあけは……」の歌については、三行にわたっていたが、本稿ではそのような例はなかった。

【千】は前稿までの範囲と同様に和歌が二行にわたっていた。なお、前稿までの範囲と異なり、一文字空けて地の文に続く例はなかった。なお、三丁表7行目「人はいさ思ひやすらん玉かつらおもかけにのみいと、見えつ、」は、【千】では、該当箇所の右の余白に、本文のサイズよりも小さい字で傍記の形で記入されていた。

次に、解釈などに関わる異同を、前稿までと同様に以下の(1)～(4)に分類した。

(1) 【国】【千】にはないが【学】のみにある注記

【学】には本文の上に段数が記されている。また、勅撰和歌集に入集していることについての注記が施されているところがある。それ以外にも、以下の①～⑤については、本文の上や左右に注がつけられている。

①十二丁表5行目…「古今」の下に「ゆきかへり」と注記があり、【国】「あま雲の」【学】【千】「あまくもの」となっているところが、『古今和歌集』(恋歌五・七八五・二九九頁<sup>注4</sup>)では「ゆきかへり」となっている。直前の「女」の和歌の冒頭が「あまくもの」であることや内容を考えると、『伊勢物語』のほうが「女」の歌に、より呼応する形となっている。

②十四丁表10行目…【国】【千】「おとこも女も」の部分、【学】のみ、該当箇所の右側に傍記されている。

③十六丁裏9行目…「古今」の左側に「小町」と和歌の作者が記されている。

④十七丁表2行目「みなと」の右側に「一本 なみた」、「哉」の右側に「らし」の注記がある。この部分、【国】【学】【哉】【千】「かな」で、詠嘆の意味になるが、【学】の傍記に従うと推定の意味になる。

⑤十七丁裏1行目…「むかし」御方の花の」の右側に二行にわたって傍記がある。

貞観十一年二月貞明親王為皇太子于時高子為女御

依春宮母儀号也去年十二月廿六日誕生高子年廿七

二〇二三年の範囲（二丁表から五丁表）では、（1）の項目に分類されたのは人物についての注のみで、二〇二四年の範囲（五丁裏から十丁裏）ではすべて人物以外についての注であったが、本稿では両者が見られた。

（2）文の終止など文法にかかわる例

以下の四例があげられる。

①十一丁裏6行目…【国】「そ（ぞ）」だが、【学】【千】「も」となっている。【国】は係助詞「ぞ」によって、歌の最後が係り結びで「見ゆる」（連体形）となり、字余りになるはずだが、そうはなっていない。【学】【千】の場合は係り結びがないので、歌の最後が終止形「見ゆ」で問題がない。

②十三丁表5行目…【国】【学】「すまひし」、【千】「すまひ」となっている。過去の助動詞「き」の有無であるが、【千】は連用形で終わっているのも、和歌の文字数が三十字になっているのも不審であるし、「し」の文字を誤って落と

したと考えられる。

③十四丁表8行目…【国】【学】「なん／なむ」とあるところに、【千】はない。この「なむ」は係助詞である。文末は「ける」（連体形）であることから、「なむ」がないと文末の形がおかしくなる。

④十七丁裏3行目…【国】「なき」だが、【学】【千】「なし」となっている。係り結びがないのに【国】は連体形になっている。

まず、用例のうち、【国】が孤立しているのは二例（①④）で、文法的に不審な例であった。一方、②③は【千】が孤立し、文法的に不審な例であった。前稿までの範囲（二丁表から十丁裏）と合わせると、【国】のみ不審な例は四例、【千】のみ不審な例は三例となる。

### （3）意味が変わる例

意味が変わるものとしては、以下の五例があげられる。

①十五丁表9行目…【国】【千】「心にく、（く）」だが、【学】「心にく」となっている。（新全集<sup>註</sup>）本文は「心にく」のままで、（新全集）頭注には「心にく」は「心にくし」の語幹。「心にくく」と同意で、「く」の誤脱かとも考えられている」とある。【学】のみ一文字誤脱と考えるのが妥当か。

②十五丁裏7行目…【国】【学】「いひけれと（ど）」と逆接だが、【千】「いひければ（ば）」と順接になっている。ここは文脈から逆接が適当である。

③十七丁表一行目：【国】「わひ(び)ける」、【学】【千】「わひ(び)たりける」となっている。【国】でも解釈はできるが、存続の意味が加わる【学】【千】のほうが文脈からは自然か。

④十七丁裏六行目：【国】「こ(ご)たち」、【学】【千】「こ(ご)たちの」となっている。【国】のように「の」がないと「御達」が局の前を通るの意味になり、文脈に合わない。

⑤十七丁裏七行目：【国】「くさは(ば)の」、【学】「くさ葉よ」、【千】「くさは(ば)に」と本文が分かれている。解釈は、【国】「草葉になるだろう宿命を見よう」、【学】「草葉よ、なるだろう宿命を見よう」で、この二つであれば、【学】のほうが話しかけている感じが出る。【千】はこれから草葉になるという意味で、「草葉になる宿命を見よう」となっており、少し違う意味になる。この部分、(新全集)<sup>注6</sup>頭注が指摘するように『続万葉集』の和歌によるとすれば、【学】が妥当であるということになる。

以上の五例のうち、【国】が孤立している(三本それぞれ本文が異なるものを含む)のは三例(③④⑤)で、これらは他の写本のほうが妥当な本文を有していた。一方、①②については、それぞれ【国】が妥当な本文のほうに入っていた。

#### (4) その他の例

異同は認められるが、解釈がそれほど変わらない、あるいはどちらでも解釈が可能な例としては、以下の①～⑮の一五例があげられる。

①十一丁裏4行目…【国】「はな」、【学】【千】「花の」となっている。「の」の有無の違いはあるが、意味はそれほど変わらない。

②十二丁裏5行目…【国】【学】「らし」、【千】「へ(べ)し」となっている。【国】【学】「らし」でも【千】「べし」でも推定の意味で解釈できる。

③十二丁裏8行目…【国】【学】「思ひて」、【千】「思」となっている。【千】は漢字一文字で「おもひ」と読ませると考えると、「思ひて」とあまり意味が変わらない。

④十二丁裏8行目…【国】「行(いき)なむ」、【学】【千】「いなん／いなむ」となっている。両者の意味はそれほど変わらない。

⑤十三丁表2行目…【国】【学】「なに、(に)よりてかか、(か)らん／なに、(に)よりてかか、(か)らむ」、【千】「なに、(に)よりてかからむ」となっている。【国】【学】の場合、「なに、(に)よりてか」の「か」(係助詞)によって疑問の意味が加わるが、大きな意味の違いはない。

⑥十三丁表4行目…【国】「、(み)れと(ど)」、【学】【千】「、(み)けれと(ど)」となっており、過去の助動詞「けり」の有無はあるが、大きな違いはない。

⑦十三丁裏8行目…【国】「たえける」、【学】【千】「たえにける」となっている。完了の助動詞「ぬ」の有無で、【国】「絶えた」、【学】【千】「絶えてしまった」の意味の違いはあるが、大きな違いではない。

⑧十五丁裏6行目…【国】【千】「ぬる」、【学】「ふる」となっている。どちらでも解釈は可能だが、【国】【千】は「恋しく思っては寝る」、【学】は「恋しく思っては過ぐす」の意味になる。

⑨十五丁裏7行目…【国】「すます(ず)」、【学】【千】「おとこすます(ず)」となっている。「おとこ」がなくても解

釈ができ、どちらでも内容は同じである。

⑩十六丁表1行目…【国】「けるを」、【学】【千】「けるに」となっている。どちらでも逆接で解釈でき、意味は変わらない。

⑪十六丁表4行目…【国】「今夜」、【学】【千】「こよひ」となっている。どちらでもそれほど意味は変わらない。

⑫十六丁裏10行目…【国】【学】「なりにける」、【千】「なりける」となっている。完了「ぬ」の有無の違いで、【国】【学】「なってしまった」と【千】「なった」の意味の違いはあるが、どちらでも解釈は可能である。

⑬十七丁表7行目…【国】【千】「かのこさ(ざ)りける」だが、【学】「こさ(ざ)りける」となっている。文脈からは「かの」がなくても解釈でき、解釈にさほど違いはない。

⑭十八丁表5行目…【国】【千】「いまた(だ)だが、【学】「また(だ)」となっている。意味はそれほど変わらないが、直後に「また(だ)」が続くので、【学】は重複感がある。

⑮十八丁裏4行目…【国】「願たて」、【学】【千】「まとひて願たて」となっている。【学】【千】のほうが、親が慌てる様子が表現されることになるが、【国】のようになくても文意は通じる。

以上の十五例のうち、【国】が孤立しているのは八例(①④⑥⑦⑨⑩⑪⑮)であった。

これらの結果から、「1」仮名・漢字表記については、【国】は他の二本よりも漢字を使用する割合が多いことが前稿までと変わらず、「2」和歌の表記についても【国】は前稿までの範囲との間に違いはなかった。(1)は【学】の注記に関する問題なのでおくとして、(2)～(4)の異同についてまとめると、合計二十四例のうち【国】が孤立していたのは十三例で、そのうち【国】よりも他の写本のほうが妥当な本文を有していると考えられるものは五例で

あった。一方、【国】【学】が一致しており、【千】よりもすぐれた本文を持っていると考えられる例は三例あったが、孤立した【国】が他の写本よりすぐれた本文を有していると判断できる例はなかった。

二〇二三年は十二例中、【国】が孤立しているのが十例、二〇二四年は十七例中、【国】が孤立しているのは十五例であったのと比較すると、本稿の範囲では【国】が孤立している確率は低かった。二〇二三年から本稿までの範囲を合計すると、五十三例中、三十八例で【国】は孤立しているということになる。

#### 四、むすび

本稿では、室町末期の書写とされる『伊勢物語』の国士館大学蔵本の十一丁表から十八丁裏の十六ページ分について翻刻を行い、学習院大学蔵本と千歳文庫蔵本との異同を確認してきた。本稿の範囲での他の本との違いは、十七丁裏と十八丁表との間に脱落（または綴じ間違い）があり、内容としては、十六段の途中から三十一段まで、三十九段の途中から四十一段の途中までとなっていることであった。綴じ間違いであれば、三十二段から三十九段までの途中の内容が、数丁後に現れてくるので、今後の調査で注視していく必要がある。

その他の結果としては、学習院大学蔵本と千歳文庫蔵本が一致し、国士館大学蔵本が孤立している例は二十四例中十三例と前稿までよりは多くなかったが、前稿までと合計すると五十三例中三十八例という結果になった。二〇二四年と同様に本稿でも国士館大学蔵本と学習院大学蔵本が一致し、千歳文庫蔵本よりもすぐれた本文を有している例があったが、国士館大学蔵本のみがすぐれた本文を有している例は見つからなかった。

このように、前稿までと同じ傾向も見られるが、異なる点もあることから、次年度以降もより範囲を広げて調査を

続け、それによって、国士館大学蔵本の位置づけをより明らかにしていく計画である。

## 補注

注1…松野彩・二〇二二年度中古ゼミ四年生「国士館大学蔵『伊勢物語』の研究（二）」（国士館大学国文学会編『國文學論輯』四四、二〇二三年三月）の調査対象は二丁表から五丁表である。松野彩・鈴木健太郎・二〇二三年度中古ゼミ四年生「国士館大学蔵『伊勢物語』の研究（二）」（国士館大学国文学会編『國文學論輯』四五、二〇二四年三月）の調査対象は五丁裏から十丁裏である。本稿では、それぞれ、「二〇二三年」「二〇二四年」と略して示す。

注2…小林茂美校注『影印校注古典叢書6 伊勢物語』（新典社、一九七五年）によって本文を確認した。学習院大学蔵本は、現在、最善本とされ、注5の『伊勢物語』の底本となっている。

注3…正徹奥書、蜷川智蘊筆、片桐洋一編『影印本シリーズ 伊勢物語』（新典社、一九六六年）によって本文を確認した。

注4…小沢正夫・松田成穂（校注・訳）『新編日本古典文学全集 古今和歌集』（小学館、一九九四年）

注5…片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子（校注・訳）『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館、一九九四年）

注6…注5に同じ。

※翻刻は十二丁表（高橋諒太）十二丁裏（高橋匠）、十二丁表（二村彩音）、十二丁裏（濱畑玲美）、十三丁表（青木優花）、十三丁裏（小澤美優）、十四丁表（伊藤未羽）、十四丁裏（眞貝利舞）、十五丁表（石本冴夏）、十五丁裏（二村彩音）、

十六丁表、十七丁表（鈴木健太郎）、十七丁裏、十八丁裏（相磯詩音乃）が担当し、松野彩が修正を施した。  
〔キーワード〕 伊勢物語 国士館大学蔵本 国士館大学蔵伊勢物語 写本 翻刻